ズィヤール朝マルダーウィーの軍隊構成について

The Military Organization
of The Ziyārīds in Mardāwīj's Period柴 山 滋^{*}
SHIBAYAMA Shigeru

ABSTRACT The 'Abbāsid rule had been declining since the tenth century. This decline meant the beginning of the period of the rule by army corps in the Islamic world. In this period, it is the Ziyārīds that had wielded power in the remote highlands of Daylam at the south-western corner of the Caspian Sea in 319-489/931-1090.

The preceding studies which specially dealt with the Ziyārīds followed their whole activity. But it is not enough to only study the special features and historical position of the Ziyārīds' army in Mardāwīj's period in Islamic history.

In this paper, the author tries to investigate the military organization of the Ziyārīds in Mardāwīj's period and the special features of this army.

As a result of studying this army, the author made clear the following points:

- (1) The military of the Ziyārīds in Mardāwīj's period consisted of two kinds of military groups, that is, ① Daylamites-Gilites and ② Turks.
- (2) In the case of the first group, the soldiers were of the ex-Asfār's soldiers, the Daylamites and Gilites who came to Mardāwīj after the death of Asfār, and the ex-Mākīn's soldiers. In the case of the second group, the soldiers were of the Amīrs' soldiers and the his bodyguards.
- (3) In this army, the military group of Daylamites-Gilites was more active than that of the Turks.
- (4) The number of people in the army was around 40,000-50,000.

We can see that the military of the Ziyārīds in Mardāwīj's period showed two kinds of features: first, this army was the great armed forces of western Iran and second, a rapid militarization of Daylamites-Gilites occurred in the first half of tenth century.

I. はじめに

10世紀以降、アッバース朝の支配権は衰退した。324/936年の大アミール（大総督, Amir

---

* 神田外語大学非常勤講師
Lecturer, Kanda University of International Studies

al-Umarā'⁽¹⁾の出現は、そのことをよく示す事柄である。それと共にアッバース朝領内には、事実上の軍事独立政権が興亡した。このような時期に319-489/931-1090年の間、現在のイランのタバリスタンとグルガン（ジュルジャー）を中心に勢力を有したのがズィヤール朝であり、その創始者がマルダーウィージ（Mardāwīj b. Ziyār）⁽²⁾である。

筆者はイスラーム史上における軍事支配体制成立の考察のため、10世紀のイスラーム世界中央地域の各勢力の軍隊の分析を行ってきた。324/936年の時点で、同地域には①アッバース朝、②ブワイフ朝以前の大アミール、③バリーディー家の三つの勢力が存在した。これまでに筆者は、②と③の勢力の軍隊の構成、およびその歴史的意義について⁽³⁾考察してきた。本稿では、後のブワイフ朝以前、及びブワイフ朝の大アミール政権に基盤を提供することになるズィヤール朝の創始者である、マルダーウィージの軍隊を取り上げる。

これまでにズィヤール朝を専門に取り扱った研究には、フアール、カビール、ボズワース、マイルズの各論考があるが、それらは主として同朝の概要や貨幣についての考察である。マルダーウィージの軍隊に関しては彼の殺害後、彼の軍隊が分裂しブワイフ朝以前の大アミール政権、ブワイフ朝、タバリスタンのズィヤール朝といった、その後約100年間に亘り現在のイラン・イラクの地域で活躍した3つの勢力の基盤となった点が、⁽⁴⁾すでにいくつかの研究や概説書の中で指摘されている。しかし、そのような重要な意味を有するにもかかわらず、彼の軍隊に関する具体的な考察は、これまで必ずしも十分に⁽⁵⁾なされてこなかった。本稿ではマルダーウィージの軍隊の構成や規模を史料からできるだけ詳細に跡づけ、彼の軍隊の特色や歴史上の意義について考察する。

本稿で使用した史料と略号は末尾に記したが、その中で主として依拠したものは、al-Mas'ūdi の *Murūj al-Dhahab*, Miskawayh の *Tajārib al-Umam*, 及び Ibn al-Athir の *Al-Kāmil fī al-Ta'rikh* である。

II. ズィヤール朝⁽⁶⁾（319-483/931-1090年）とマルダーウィージの活動⁽⁷⁾

ズィヤール朝は、初代マルダーウィージから第8代ギーラーン＝シャー（Gilān Shāh）の時代に滅亡するまで、主にカスピ海南岸地域のタバリスタンとグルガンに存在した王朝である。

ズィヤール朝の創始者であるマルダーウィージは、⁽⁸⁾ギール人の王族の血筋を引く父親とルーヤーン地域のイスパフバドゥ（Ispahbadh）⁽⁹⁾の家系出身の母親の間に生まれた。彼は最初タバリスタンのハサン家のシーア派の統治者に仕えたようだが、その活動の様子が明らかになるのはギール人の傭兵隊長アスファール・ブン・シーラワイフ（Asfār b. Shirawayh）⁽¹⁰⁾に総指揮官（Amīr al-Jaysh）として仕えてからである。彼は主君のアス

ファールに対して反乱を起こし、殺害した。

マルダーウィージはアスファールが領有していたダイラム、ギーラーン地方を受け継ぎ、ハマダーン郊外でアッパース朝軍を破り、⁽¹¹⁾ディーナワール、イスファハーン等を奪取した。319-20/931-32年にかけては、ハルワーンに至るジバル地方の大部分を獲得した。また、この時期に彼はアッパース朝に使者を派遣して支配地域の割当を要求した。⁽¹²⁾アッパース朝は彼の要求を認めた。321/933年、彼はタバリストーン、グルガーン、及びホラーサーン西部を保持していたマーカーン・ブン・カーキー (Mākān b. Kākī) ⁽¹³⁾と衝突した。彼はマーカーンを打ち破りこれらの地域を支配下に入れたが、マーカーンがサーマーン朝の後ろ盾を得ると、貢納と引き替えにライを保持するという条件でサーマーン朝と和議を締結した。この時、アリー、ハサン等のブワイフ家の兄弟がマーカーンのもとからマルダーウィージの配下に移った。322/934年、カラジ (al-Karaj) に任命されていたブワイフ家のアリーが独立を企てた。マルダーウィージはイスファハーンに進軍し、そこから分遣隊をアフワーズに派遣した。彼の軍隊はアッパース朝軍と衝突した後、アフワーズ地方を支配下に置いた。これにより、アリーは彼の配下に戻った。このようにしてマルダーウィージは、短期間でダイラム、ギーラーン、タバリストーン、グルガーン、ジャバル、そしてアフワーズに至るまでの広大なイラン西部の諸地方を征服した。さらに彼はバグダードに進軍し、カリフ制を廃止し、自ら再生ペルシア帝国の支配者を宣言するという野望を抱いた。⁽¹⁴⁾しかし、323年2月/935年1月、彼はサダク (al-Sadhaq: 1月10日の「かがり火の夜」といわれるの祭事) ⁽¹⁵⁾の際に、イスファハーンの自宅の風呂場で配下のトルコ人の親衛隊の一部に殺害された。

III. マルダーウィージの軍隊の構成と規模についての記述

以下、彼の軍隊の構成と規模に関する史料の記述を年代順に掲げる。

[319/931-32年] まで

1. アスファールはカズウィーンに進み、マルダーウィージの到着を待った。マルダーウィージは信頼できる指揮官達 (quwwād) に彼 (マルダーウィージ) とサッラール (Sallār) が協定を結んだことを伝えた。彼等はそれに応じた。軍隊はアスファールの品行の悪さと不正によって、彼を嫌悪していた。(中略) マルダーウィージとサッラールはアスファールの方へ進んだ。そして、この知らせが彼 (アスファール) に伝わった。彼 (アスファール) の部下 (aṣḥāb) は、マルダーウィージに忠誠を誓った。彼等は、悪夢を経験していた。これにカズウィーンの住民が呼応し、続いて軍隊 (jund) がアスファールに対して暴動を起こした。彼 (アスファール) は彼のギルマーン (ghilmān, ghulām (若者) ⁽¹⁶⁾ の複数形) の集団を率いて逃亡し、ライに行った。

2. マルダーウィージのところに来たダイラム (Daylam) 人とジール (Jil) 人は、受け入れられた。彼 (マルダーウィージ) は軍 (al-jund) に寛大さを示し、軍隊に対する給与を増やした。人々があらゆる方面から来た。そして軍隊 ('asākir) は拡大し、軍 (juyūsh) (の数) は多くなった。彼は手元にある財産を増やせず、兵士達 (al-rijāl) への支払いが十分にできなかった。⁽¹⁷⁾

3. (ハマダーンの攻撃時に) マルダーウィージの兵士達はジール人とダイラム人の約4000名が殺害された。⁽¹⁸⁾

4. マルダーウィージはイスファハーンへ進み、滞在した。彼はライ、クム、ハマダーン、その他の地域の軍隊 ('asākir) を除いて、約5万、あるいは4万を率いていた。⁽¹⁹⁾

[321/933年]

5. 一方、アブー・アルハサン・アリー・ブン・ブワイフ (Abū al-Ḥasan 'Alī b. Buwayh) と彼の兄弟のアブー・アリー・アルハサン (Abū 'Alī al-Ḥasan) は、マーカーンの最初の敗北で彼が弱くなった時、彼の許可を求めた後にマルダーウィージの所に行った。(中略) そして、アリー・ブン・ブワイフに指揮官達 (al-quwwād) の一団が従った。アリー・ブン・ブワイフと彼の兄弟のアブー・アリーはマルダーウィージの所に行った。彼は彼等を受け入れ、厚遇し、下賜用礼服 (khil'a) を与えた。そして、マーカーンの指揮官達をジャバルの各地に任命した。一方、アリー・ブン・ブワイフをカラジ (al-Karaj) に任命し、アッラシュカリー・ブン・ムルディー (al-Lashkari b. Murdī) を彼が以前にいた地域であるディーナーワンド (Dīnāwand) に、スライマーン・ブン・サルカラ (Sulaymān b. Sarkalah) をハマダーンに任命した。そして、他の指揮官達も同様にした。⁽²⁰⁾

[322/933-34年]

6. (アリー・ブン・ブワイフの勢力が大きくなった時) マルダーウィージは、反抗しているアリー・ブン・ブワイフに対する対応を始めた。そして、彼の兄弟のウシュムキールを彼の代理としてライに戻した。そして彼の総指揮官 (Isfahsalār) のシーラジ・ブン・ライラー (Shiraj b. Laylā), 彼の侍従 (hājib) のアッシャープシティー (al-Shābushtī), ジール人とダイラム人から成る2400名、バクラーン (Bakrān) とイスマイール・アルジャーリー (Isma'īl al-Jilī) のような指揮官達の長 (wujūh al-quwwād) をアフワーズに派遣した。⁽²¹⁾

[323/934-35年]

7. 人々を彼 (マルダーウィージ) に対して扇動し、彼の殺害を実行したのは、〔後に〕バグダードで軍隊のアミールになったトゥーズーン (Tūzūn), ヤールーク (Yārūq), イブン・バグラール (Ibn Baghrā), ムハンマド・ブン・ヤナール・アッタルジマーン

(Muḥammad b. Yanāl al-Tarjīmān) であり、彼等をトゥーズーンの前にイラクを支配したバジュカム (Bajkam) がまとめていた。⁽²²⁾

8. トルコ人 (al-Atrāk) は2つの集団に分裂した。1つの集団は、アリー・ブン・ブワイフに保護を求めてファールスの方向へ行った。彼等の中には、イラクの支配者になるトゥーズーンに目をつぶされた、ハジハジ (Khajkhaj) がいた。他方は、ジャバルに行った。こちらは数が多かった。彼等の中にイラクの支配者となり、ラーディーの時代に大アミールになったバジュカムがいた。⁽²³⁾

9. ラビー・アッワル月16日にイスファハーンのカーディーからマルダーウィージ殺害に関する手紙が着いた。その手紙によると、彼 (マルダーウィージ) はジール人とダイラム人 (彼等は彼の親衛隊 (Khawāṣṣ) である) や彼が占領したアル・ライとその地域の住民 (Ahl al-balad) からなるものと、トルコ人 (Atrāk) とホラーサーンの住民 (Ahl Khurāsān) からなる2つの範疇の軍隊 ('askar) を置いていた。彼は一人のトルコ人に「物事を」独占的に任せた。ダイラム人がこれを見て、彼を皮肉った。彼は言った。「あなた方に対してトルコ人が持っているものを取り上げ、あなた方の前で彼等を戦いに駆り立てよう。あなた方は私の親衛隊 (Khāṣṣa) であり、私はあなた方とともにあり、あなた方のためにある」。これがトルコ人に届くと、彼等の意見は彼の殺害で一致した。⁽²⁴⁾

10. 彼 (マルダーウィージ) は彼の親衛隊 (khāṣṣa) の中に、アミール達 (umarā') や指揮官達 (quwwād) の配下にあるトルコ人 (Atrāk) の軍隊 ('askar) 以外に、約4000名のトルコ人からなるマムルーク達 (mamalik) を持っていた。⁽²⁵⁾

IV. ギヤール朝マルダーウィージの軍隊の構成に関する考察

1. マルダーウィージの軍隊の構成要素

マルダーウィージの軍隊の構成要素を示す記述は、上記の史料9である。それによると彼の軍隊にはダイラム人・ギール人、彼が占領したライとその地域の住民から構成される部隊とトルコ人、ホラーサーンの住民から構成される2つの部隊があった (図表)。以下、それぞれの部隊について検討する。

(1) ダイラム人・ギール人、ライとその地域の住民からなる部隊

① ダイラム人・ギール人部隊

マルダーウィージの軍隊においてダイラム人・ギール人の部隊は、さらに1) 元アスファール配下のもの、2) アスファール殺害後にマルダーウィージの下に入ったもの、3) 元マーカーン配下のもの、の3つの集団から成立していた。

1) 元アスファール配下のもの

マルダーウィージはアスファールの総指揮官であったため、最初から自分の軍隊を

持っていたわけではない。彼が軍隊を保有したのは、主君のアスファールに対して反旗を翻した時である。この時にアスファールの部下達が、マルダーウィージの配下に入った（史料1）。この直後にアスファールが逃亡していることから、アスファールの軍隊の大部分がマルダーウィージの配下に入ったと考えられる。この時のアスファールの軍隊構成は、史料中に明記されていない。しかし、その軍隊の構成を示唆する記述には、例えば、以下のようなものがある。315/927-28年のアームル（Āmul）でのマーカーンとの戦いの際に、

アスファールは7000のトルコ人（Turk）、ギール人（Gil）、ダイラム人（Daylam）から成る軍隊を集め、アームルへ行った。そこで彼はダリジュール（Darijūr）⁽²⁶⁾として知られている広場のところでマーカーンと三日三晩戦った。

また、317/929-30年にアスファールがアルハサン・ブン・アルカーシム・アルハサニー・アッダーイー（al-Ḥasan b. al-Qāsim al-Ḥasanī al-Dā'i）⁽²⁷⁾及びマーカーンの勢力とカズウィーンやライの支配をめぐる戦った際に、

マーカーン・ブン・カーキーは退き、タバリスタン地域に入った。アッダーイーは彼（マーカーン）の前で敗北し、マーカーンは隠れ家へ避難した。ホラーサーン騎兵（khuyūl Khurāsān）、ジール人（al-Jīl）、ダイラム人（al-Daylam）、トルコ人（al-Atrāk）は彼（マーカーン）を追跡し、彼等をアスファール・ブン・シーラワ⁽²⁸⁾イフが率いていた。

これらの記述からアスファールの軍隊の中にダイラム人やギール人の存在が確認できる。そして、その大半を引き継いだマルダーウィージの軍隊の中にも、当初からこれらの部隊が存在したと考えられる。

2) アスファール殺害後にマルダーウィージの下に入ったもの

アスファール殺害後、マルダーウィージが配下の部隊の待遇を改善すると、ジャバル、ライの周辺等の各地からダイラム人・ギール人がやって来て、彼がその者達を受け入れ、寛大に扱ったので、彼の軍隊の規模は大きくなった（史料2）。これらのダイラム人・ギール人は、史料上、アスファールやマーカーン配下の者たちとは区別されているので、それ以外の者であったと思われる。その数について、具体的な数字は明記されていないが、その後、彼の兵士達に対する支払いが十分にできなくなったことから、かなりの数が彼の配下に入ったと考えられる。

3) 元マーカーン配下のもの

321/933年、マルダーウィージがマーカーンを破りタバリスタンとグルガーンの支配権を奪うと、マーカーンの配下から指揮官達の一団が彼の下にやって来た。この中に、後にブワイフ朝を建てるアリー・ブン・ブワイフとアルハサンのブワイフ家の兄弟、アッ

ラシュカリー、スライマーン等が含まれていた（史料5）。この時のマーカーンの軍隊構成を詳細に示すものはない。しかし、315/927-28年のアスファールとのアームルをめぐる戦いの際に彼がダイラム人・ギール人に支持されていたアルハサン・ブン・アルカーシム・アルハサニー・アッダーイーと行動を共にしていること⁽²⁹⁾、及び前述の317/929-30年にアスファールがアルハサン及びマーカーンとカズウィーンやライの支配をめぐって戦った際にも多くのダイラム人・ギール人の軍隊と共にマーカーンがいたという記述がある⁽³⁰⁾。これらの記述は直接マーカーンの軍隊の構成を述べたものではないが、彼がダイラム人傭兵隊長の一人とされている点⁽³¹⁾、また彼がダイラム人達の指導者に選出された際の経緯⁽³²⁾も考え合わせると彼の軍隊もダイラム人・ギール人が主力であったと思われる。またこの時マーカーンの軍隊からどの位の規模の軍勢がマルダーウィージの配下に入ったのか不明だが、マーカーンがマルダーウィージの死後まで十分な活動ができなかった点から、その大部分がマルダーウィージの配下に入ったものと思われる。

②ライとその地域の住民からなる部隊

ライとその地域の住民は、史料中ではダイラム人・ギール人と並記されている（史料9）。この部隊に関する記述はこれ以外ないため、詳細は不明である。ライはジャバル地域に位置するが、地理的にはタバリスターンやダイラム地域に近く、マルダーウィージがアスファールからの自立後、早い時期に支配下に置いた地域である。またこの部隊はダイラム人・ギール人とは史料上区別されているものの、その地理的な関係から利害関係は比較的一致していると思われる。そのため、他の史料ではダイラム人やギール人の集団に含められている可能性もある。

(2)トルコ人、ホラーサーンの住民の部隊

①トルコ人部隊

マルダーウィージのトルコ人部隊は史料10によると、1)アミール達と指揮官達の配下にある部隊と、2)約4000名の親衛隊としてのマムルークの二要素から構成されていた。

1)アミール達や指揮官達の配下にあった部隊

マルダーウィージは主君のアスファールの軍隊を受け継いだ⁽³³⁾が、その軍隊についてはダイラム人・ギール人部隊の項で引用した315/927-28年と317/929-30年の記述のとおりである。それから明らかなようにアスファールの配下にはダイラム人・ギール人と同様⁽³³⁾に早い段階からトルコ人が存在し、その他にもトルコ人の存在を示した記述が幾例かある。従って、マルダーウィージの軍隊にも当初からトルコ人部隊が存在していたと思われる。しかし、その後の各種の戦闘をはじめとしたマルダーウィージの活動を示す史料中に、トルコ人部隊は現れない。短期間で支配地域や勢力を増大させた彼の活動から考えてこの点は不可解であるが、トルコ人部隊について、これ以上のことは不明である。

2) 親衛隊

マルダーウィージの軍隊には史料上ハワーッス (khawāṣṣ) やその単数形であるハーッサ (khāṣṣa), あるいはギルマーン (ghilmān)⁽³⁴⁾ と称される4000名に及ぶ親衛隊が存在していた。この親衛隊はマルダーウィージが出馬するときには彼の馬に鞍を安置したり、門の前に勢ぞろいして待機したりした。⁽³⁵⁾

親衛隊の構成員の一部とその具体的な行動が明らかになるのは、マルダーウィージ殺害とその後の行動においてである。マルダーウィージ殺害に加わったのはバジュカム、トゥーズーン、ヤールーク、イブン・バグラール、ムハンマド・ブン・ヤナール・アッタルジマーン、ハジハジであり、彼等をバジュカムがとりまとめていた (史料7・8)。このバジュカムがマーカーンの配下から来たことは、他の部分の記述から確認できる。⁽³⁶⁾

マルダーウィージ殺害後、彼等は2つの集団に分裂した (史料8)。一方は当時ファールスにいたアリー・ブン・ブワイフに保護を求め、その配下に入った集団であり、その中にハジハジが含まれていた。他方はバジュカムに率いられた300名程の集団で、ジャバル、ジスル・アッナフラワーンを経てバグダードに入城したが、最終的にはワシートのイブン・ラーイクの配下に入った。前者がブワイフ朝の軍隊における最初のトルコ人部隊であり、⁽³⁷⁾ 後者がブワイフ朝以前の大アミールの権力基盤の中核となった「バジュカム・アッラーイキー (Bajkam al-Rā'iqī)」と呼ばれた集団である。⁽³⁸⁾

ここでマルダーウィージの親衛隊について付しておきたいことは、ダイラム人・ギール人に対しても親衛隊を意味する「ハワーッス」や「ハーッサ」の用語が使用されていることである。これは史料9において、この手紙を中央政府に書き送ったイスファハーンのカーディーがダイラム人とギール人をマルダーウィージの「ハワーッス」であると表現し、さらにあらゆる事柄を一人のトルコ人に任せていることをダイラム人とジール人に皮肉られた際に、マルダーウィージが彼等に対して「あなた方は私のハーッサである」と言ったことを記録している。また史料10には「彼は彼の親衛隊の中に、(中略) 約4000名のトルコ人からのマムルークを持っていた」という微妙な表現がみられる。これらの記述は、トルコ人以外にもダイラム人とギール人の親衛隊がいた可能性を示唆している。しかしトルコ人の場合と違い、ダイラム人・ギール人の親衛隊の活動を明確に示す記述はない。また史料9における「ハワーッス」や「ハーッサ」の用語使用については、マルダーウィージがダイラム人やギール人を慰撫する目的で使用した可能性もある。従って、現段階ではマルダーウィージの軍隊にダイラム人・ギール人の親衛隊が存在したと明言することはできない。

② ホラーサーンの住民の部隊

この部隊もマルダーウィージの活動には、一切登場しない。しかし、マルダーウィー

ジが受け継いだアスファールの軍隊の記述には、例えば以下のようなものがある。315/927-28年にアスファールがマーカーンとの戦闘に敗北し、ナスル・ブン・アフマド (Naṣr b. Aḥmad, サーマーン朝の君主) の軍司令官であるアブー・バクル・ブン・イリーサ (Abū Bakr b. Ilisā') のもとに身を寄せた。しかし、その直後にアブー・バクルが亡くなると、その軍隊はアスファールに忠誠を誓っている。そしてその後のこととして、

マーカーンとダーイー (Dā'i, 著者注: al-Ḥasan b. al-Qāsim のこと) は今や和解し、大きな軍隊が彼等の周辺に集まった。そして彼等はライに進み、その知事であったムハマド・ブン・サアルーク (Muḥammad b. Ṣa'lūk) を追放し、そこを併合した。アスファールは彼等の不在を聞くとホラーサーンの軍隊 (laskare Khorāsān) とワシュムギール (Washmgir) の長兄であるアブー・アルハジャージ・マルダーウィージ・ブン・ジャール、この遠征に加わることの許可を求めたカラータキン・サーマーニー (Qarātakīn Sāmānī) と共にタバリスタンに進んだ。⁽³⁹⁾

また先にダイラム人・ギール人部隊の項でも指摘したように、317/929-30年にアスファールがアルハサンとマーカーンの勢力とカズウィーンやライの支配をめぐって戦った時、彼の率いていた軍隊の中にホラーサーンの騎兵の存在が明記されている。⁽⁴⁰⁾

これらの記述から、アスファールの軍隊にトルコ人とは別にホラーサーンの住民の部隊が存在したことは確かである。マルダーウィージがアスファールの軍隊の大半を引き継いだので、彼の軍隊にも当初からホラーサーンの住民の部隊が存在していたと思われる。しかし、トルコ人部隊と同様、この部隊の実態についてもこれ以上のことは不明である。

2. 軍隊の規模

マルダーウィージの軍隊の規模については、それに関する記述が少ないので正確に知ることが不可能である。それについては、319/931-32年までのハマダーン攻略中に彼の兵士達のダイラム人とギール人の4000名が殺害されたというもの (史料3), 319/931-32年に彼がイスファハーンに滞在した際に4-5万名を率いていたというもの (史料4), 322/933-34年に総指揮官のシーラジ等をアフワーズに派遣した際にダイラム人とギール人から成る2400名を派遣したというもの (史料6) である。史料3と史料6は派遣軍の記述であることから、彼の軍全体の規模を暗示するものは史料4である。この史料からはこの他にもライ、クム、ハマダーンの地域に軍隊が存在したことが伺えるので、これを考慮すれば、彼の軍は4-5万名からそれ以上ということになる。このような軍隊の規模の数字は一般的に誇張される傾向があり、またこの数字が史料中に1ヵ所しか出てこないのも、検証が不可能なこともあり、そのまま信用することはできない。しかし、ブ

ワイフ朝以前の大アミールとバリデー家の軍隊が約1万程度⁽⁴¹⁾、ブワイフ朝においてもその数の最高は記録上では2万5千名⁽⁴²⁾というような同時期のイラン・イラク・シリアといったイスラーム世界の中央地域の他の勢力と比較すると、彼の軍隊は大規模なものであったといえよう。また、マルダーウィージは殺害の直前まで首都バグダードへの進軍と古代ペルシア帝国の再現を目指しており、その目的達成のためにはそれなりの裏づけがあったと思われ、その裏づけの1つが大規模な軍隊であったとも考えられる。

V. 結 語

これまでの考察で明らかなように、マルダーウィージの軍隊は(1)ダイラム人・ギール人、ライとその地域の住民からなる部隊と(2)トルコ人、ホラーサーンの住民の部隊の2つの範疇から構成された、その規模4-5万に及ぶ大規模なものであった。当時のイスラーム世界の軍隊の構成は非常に多民族であるというのが通説である。当時のアッバース朝をはじめとしたイラク地域の勢力の軍隊にはトルコ人、ダイラム人だけでなく、その役割がたとえ補助的なものであってもアラブ人、クルド人等の存在が確認でき⁽⁴³⁾、シリアやエジプトの勢力ではベルベル人、黒人、スラブ人等の人種も存在した⁽⁴⁴⁾。この点からすると、彼の軍隊の非常にシンプルともいえる構成は一見、大変特異であるように思われる。しかし、その一方で軍隊の構成はその勢力が拠点とする地域性を示すものでもある。マルダーウィージの軍隊は、当時のダイラム人指導者の第一人者であるアスファールやマーカーンの軍隊の大部分を吸収することにより成立した10世紀前半のイラン西部の勢力を集大成した一大勢力である。また、一連の戦闘では、ダイラム人・ギール人がトルコ人よりも顕著な活躍をしたことが史料上から明らかである。この点は、10世紀以降にダイラム人・ギール人がイラン・イラク地域を中心に急速に軍人として活動の場を拡大したと密接な関係がある。彼の軍隊は、まさに10世紀前半のイスラーム世界中央地域におけるこのような社会現象の一端を表したものであったといえよう。

注

- (1) 大アミールについては、“Amir al-Umarā” (by K. V. Zetterstéen), *The Encyclopaedia of Islam*, New ed. (以下 E. I. 2 と略記), Leiden, 1954-, I, 446.
- (2) この時期を中心としたカスピ海南岸地域の状況については、例えば、以下のものを参照。V. Minorsky, “La domination des Dailamites,” in *Iranica: Twenty Articles*, Teheran, 1964, 12-30; “Daylam” (by V. Minorsky), *E. I. 2*, III, 189-194; W. Madelung, “The minor dynasties of northern Iran,” in *The Cambridge History of Iran*, Vol. 4, 1975, 198-249; 余部福三「ダイラム人・ギール人のイスラーム改宗と国家形成」『史林』83/6 (2000年11月), 104-125.

- (3) 拙稿「ブワイフ朝以前の大アミールの軍隊構成について」『イスラム世界』49 (1997), 19-37; 拙稿「バリディー一家の軍隊構成について」『オリエント』41/1 (1998), 78-94.
- (4) Cl. Huart, “Les Ziyārides,” *Méms. de l’Acad des Inscrs. et Belles-Lettres* XLII (1922), 357-436; Mafizullah Kabīr, “History of the Ziyarids of Tabaristan and Gurgan (927/8–1090/1 A. D.),” *Journal of the Asiatic Society of Pakistan* 5 (1960), 1-20; C. E. Bosworth, “On the chronology of the Ziyārids in Gurgān and Ṭabaristān,” *Der Islam* 40 (1964), 25-34; G. C. Miles, “The coinage of the Ziyārid dynasty of Ṭabaristān and Gurgān,” *The American Numismatic Society, Museum Notes* 18 (1972), 119-137.
- (5) Mafizullah Kabīr, *op. cit.*, 6; W. Madelung, *op. cit.*, 213.
- (6) ズィヤール朝については “Ziyārids” (by Cl. Huart), *The Encyclopaedia of Islam*, 1st ed., VIII, 1234-35; C. E. Bosworth, *The New Islamic Dynasties*, Edinburgh, 1996, 166-167 を参照。
- (7) マルダールウィージの詳細については, “Mardāwidj” (by E. Bosworth), *E. I.* 2, VI, 539 及び Mafizullah Kabīr, *op. cit.*, 1-6 を参照。またマルダールウィージのニスバに関しては, アッダイラミー (al-Daylamī, Kāmil, VIII, 193; Muntazam, Vol. 13-14, 305; Shadrāt, Vol. 2, 283), アルジーリー (al-Jilī, Kāmil, VIII, 176), アッスラミー (al-Sulamī, Ṣūli, 20) のように必ずしも一致しない。
- (8) アラビア語史料では「ジール (Jil)」と記されているが, この民族の根拠地であるギーラーン (Gīlān) は現在イランのペルシア語圏にあるため, アラビア語史料の引用部分以外, 本稿では「ギール (Gīl)」人と記す。
- (9) 「Ispahbadh」とは, ササン朝ペルシア時代のギーラーンやタバリストーン地方の半独立の王侯である。彼等は名目的にイスラームに改宗し, 初期イスラーム時代にはタバリストーンで支配権を握っていた (Le Strange, *The lands of the Eastern Caliphate*, New York, 1976, 175)。
- (10) アスファールについては, “Asfār b. Shirawayh” (by M. Canard), *E. I.* 2, I, 688.
- (11) Miskawayh, I, 213; Kāmil, VIII, 227; Ḥamza, p. 162; Nujūm, Vol. 3, 229.
- (12) Muntazam, Vol. 13-14, 305; Takmila, 67; Shadrāt, Vol. 2, 283.
- (13) マーカーンについては, “Mākān b. Kākī” (by E. Bosworth), *E. I.* 2, VI, 115-116.
- (14) Ṣūli, 62; Muntazam, Vol. 13-14, 338-39.
- (15) Miskawayh, I, 312-315; Kāmil, VIII, 301-02; cf. Nujūm, Vol. 3, 245-46; Shadrāt, Vol. 2, 292.
- (16) Kāmil, VIII, 193-94.; cf. Miskawayh, I, 161-162; Murūj, Vol. 9, 15-19; ‘Arīb, 154.
- (17) Murūj, Vol. 9, 19; cf. Kāmil, VIII, 227.
- (18) Murūj, Vol. 9, 20.
- (19) Murūj, Vol. 9, 26; cf. Kāmil, VIII, 229.

- (20) Miskawayh, I, 277 ; cf. 'Uyūn, 271 ; Kāmil, VIII, 267.
- (21) Miskawayh, I, 301 ; cf. Takmila, 89.
- (22) Kāmil, VIII, 301.
- (23) Miskawayh, I, 315 ; cf. Kāmil, VIII, 303.
- (24) Šūlī, 62.
- (25) Murūj, Vol. 9, 28.
- (26) Ibn Isfandiyār, 291.
- (27) 彼については “al-Ḥasan b. al-Kāsim” (by W. Madelung), *E. I. 2*, Supplement, 356-57.
- (28) Murūj, Vol. 9, 7-8.
- (29) Ibn Isfandiyār, 291.
- (30) Murūj, Vol. 9, 6.
- (31) Ibn Isfandiyār, 292-3 ; Kāmil, VIII, 192.
- (32) Tājī, 60-61.
- (33) Akūshī Turkī なるものと彼の軍 (Khayl) (Ibn Isfandiyār, 292), 及びトルコ人達の集団 (Kāmil, VIII, 192) の存在を記したものがある。
- (34) 軍事集団に限定されたものではないが、この時期のグラーム (ghulām, ghilmān の単数形) については、清水和裕「グラームの諸相－アッバース朝におけるイエと軍勢力」『西南アジア研究』52 (2000), 38-58 を参照。
- (35) Miskawayh, I, 312.
- (36) Kāmil, VIII, 348.
- (37) Miskawayh, I, 315-317 ; Kabīr, *op. cit.*, 2-5.
- (38) 拙稿「ブワイフ朝以前の大アミールの軍隊構成について」, 28-30.
- (39) Ibn Isfandiyār, 292.
- (40) Murūj, Vol. 9, 7-8.
- (41) 拙稿「ブワイフ朝以前の大アミールの軍隊構成について」, 30.
- (42) 清水宏祐, 前掲論文, 69参照。但し、この数は遠征に際しての人数であり、必ずしも全軍の規模を示したものではない。また最初のイラク侵攻の際のムイッズ・アッダウラの軍隊数は2万名であったとされる (M. Kabir, *The Buwayhid Dynasty of Baghdad*, Calcutta, 1964, 136)。
- (43) 例えば、ブワイフ朝の例として C. E. Bosworth, “Military Organisation under the Būyids of Persia and Iraq,” *Oriens* 18 (1965), 162 ; 清水宏祐, 前掲論文, 67-68.
- (44) 例えば、ファーティマ朝の例として Yaacov. Lec, “The Fāṭimid Army, A. H. 358-427/968-1036 C. E. Military and Social Aspects”, *Asian and African Studies* 14 (1980), 168-169.

[主要な史料と略号]

(アラビア語)

‘Uyūn: Anonym, *Kitāb al-‘Uyūn wal-Ḥadā’iq fī Akhbār al-Ḥaqā’iq*, IV, O. Saïdi (ed), 2 parts, Damascus, Institut français de Damas, 1972-1973.

Ṣūlī: Al-Ṣūlī, Abū Bakr Muḥammad b. Yahyā (d. 335/946), *Akhbār al-Rāḍī billāh wal-Muttaqī lillāh*, J. Heyworth-Dunne (ed.), Cairo, 1935.

Murūj: al-Mas‘ūdī, Abū al-Ḥasan ‘Alī b. al-Ḥusayn (d. 345/956), *Murūj al-Dhahab Ma‘ādin al-Jawhar*, translated by C. B. de Meynard and P. de Courteille, 9vols., Ṭehrān, 1970.

Ḥamza: Ḥamza al-Iṣfahānī (d. 350/961-360/970-71), *Ta’rikh sinī mulūk al-arḍ wal-anbiyā’*, Beirut, 1921.

Tāji: Abū Ishāq Ibrāhīm b. Hilāl al-Ṣābi (d. 384/994), *al-Muntaza’ min kitāb al-Tāji*, M. M. al-Zubaydī (ed.), Baghdād, 1977.

‘Arib: ‘Arib b. Sa’d al-Qurṭubī (d. 4/10c), *Ṣila Ta’rikh al-Ṭabarī*, Leiden, 1897.

Miskawayh: Miskawayh, Aḥmad b. Muḥammad (d. 421/1030), *Kitāb Tajārib al-Umam*, in *The Eclipse of the ‘Abbāsīd Caliphate; original chronicles of the fourth Islamic century*, edited and translated by H. F. Amedrez and D. S. Margoliouth, 7vols., Oxford, 1920-1921.

Takmila: al-Hamadānī (d. 521/1127), *Takmila Ta’rikh al-Ṭabarī*, A. Kan‘ān (ed.), Beirut, 1961.

Muntaẓam: Ibn al-Jawzī (d. 597/1200), *al-Muntaẓam*, Na‘īm Zurzūr (ed.), 18vols., Beirut, 1992.

Kāmil: Ibn al-Athīr, ‘Izz al-Dīn ‘Alī b. Muḥammad (d. 630/1233), *Al-Kāmil fī al-Ta’rikh*, 13vols., Beirut, 1965-1966.

Nujūm: Ibn Tagribirdī, Jamāl al-Dīn (d. 874/1470), *Al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wal-Qāhira*, al-Qāhira, 16vols., 1929-1956.

Shadrāt: Ibn al-‘Amād (d. 1089/1679), *Shadrāt al-Dhahab fī Akhbār min Dhahab*, 8vols., al-Qāhira, 1350-1351 A. H.

(ペルシア語)

Ibn Isfandiyyār: Ibn Isfandiyyār, *Ta’rikh-i Ṭabaristān* (A. H. 613/1216-17), A. Iqbāl (ed.), Ṭehrān, 1323/1945.

(図表)